

人生の物語の共有と過去・現在・未来：
18世紀英文学と個人の記録から

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 実佳 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/0002000343

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00390

研究課題名（和文）人生の物語の共有と過去・現在・未来：18世紀英文学と個人の記録から

研究課題名（英文）Sharing One's Stories: the Retrospect, the Present and the Prospect in Eighteenth-Century English Writings in Print and in the Archives

研究代表者

鈴木 実佳（Suzuki, Mika）

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：40297768

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：研究期間の最後に単著『淑女のたしなみ・貴婦人の愉しみ：書簡から読み解くある18世紀イングランド上流女性の日常』と題し主たる研究対象としてきたスペンサー伯爵夫人（1737-1814）の手稿資料（手紙と家庭内の記録）をもとに、恋愛、交友、夫への敬愛、子どもとの関係、慈善活動、自己規律に注目した研究書としてまとめた。

他に学者としての理想に関する論文や文学の伝統の利用と未来への展望を扱う論文を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、18世紀イギリスの印刷文化興隆の時期の文学と記録をもとに、書き手と読み手、書くことへの執着に注目した。特定の個人の記録の詳細な分析による研究であるので個別性をもつ一方で、印刷物だけでなくその周辺の多様な資料を利用して、物語を構成すること、共有を欲すること、記録維持を図ることの意味を探究するという広く一般性をもつ問題を課題とした。その個別性と一般性が本研究の学術的意義であると考えられる。そこから、現代の私たちの世界の価値観を理解するための一つの視点を導くことができ、過去の記録や文学の分析から出発して、印刷文化が苦戦する今日の社会に対するメッセージを発信する創造性を得ることになると考えた。

研究成果の概要（英文）： My first set of questions aimed to reveal the importance of keeping records in understanding the past, the present and the future. Eighteenth-century British people seem to be obsessed with reading and writing, especially writing in diaries and letters. Among them Countess Spencer (1737-1814) stands out in the number and richness of documents she left, including numerous letters she exchanged with various people. I have examined, in my book on her, her daily discipline, her pleasures in reading and writing, her worries about her own indulgence and social activities and her hopes and expectations addressed to the future generations.

In addition to this, I have published papers including one on Samuel Johnson as an ideal scholar from the viewpoint of a Japanese doctor and writer, another on literature on chess games played by Caroline Howe, one of the most important correspondent of Countess Spencer, and another on home and nostalgia.

研究分野：英文学

キーワード：人生の物語 自己把握 手紙と日記 知識人 読書 情報の共有 慈善 未亡人

1. 研究開始当初の背景

人生の物語 18世紀英国の小説の登場人物の回顧談への熱意や、18世紀を生き手紙や日記を書いて残した人々の個人的記録への執着は、この時代の顕著な特色であり、これは様々な角度から研究されてきている。個人(近代的自我・主体)の内省描写を中心に、文学と社会の価値観とを結び付けた I.Watt 以来の小説研究で提示されてきている問題関心を引き継いだ研究のなかに貢献するものとして本研究を想定した。

当研究者は、この研究以前は過去を語る人々に主として関心をもってきた。自分の人生の物語を(多くはその最初から)組み立てて提示することは、小説の枠組みの重要な部分を成す。また、現実の世界で慈善を求める人々にとっては、いかに自分が援助を求めるに価するかを示して、不運による不幸が正され、社会的正義が達成されることが重大な問題だった。作品でも現実でも、過去の物語の共有と並行して、現在への注目が明確化し、現在を動かしている情報のやり取りが、会話や手紙や定期刊行物を通じてさかんに行われていると考えていたからである。このような特色をもつ時代の人々の未来についての考え方にも関心をむけることを意識したのは、現代世界にとっての英国での啓蒙の進展の重要性を示した歴史家 R.Porter の指摘によるものである。絶対的な価値観から解放されて、批判と議論が可能となった世界が見出だされ、そこに生きる人間の理性と知性によってより良い未来を創りだしていく希望と可能性への信頼がこの時代の特徴として挙げられている(Enlightenment: Britain and the Creation of the Modern World, 2000)。これにヒントを得て、当研究では18世紀の人々の現在と未来への視点を考察することを主な観点とした。

2. 研究の目的

本研究は、フィクションの中での展開と現実に生きた人々の記録の両方を使ってそれぞれの手法と動機と目的を分析し、それが個人と社会に果たした役割を考え、また、印刷物と出版を前提としない手稿の関係性を問うことを目的とした。

過去を振り返ってその最初から語っていくというのが約束事のようにになっていた18世紀の人々にとっての時間意識と自己の把握を考察するのが本研究の目的である。未来の地球や人類に注意を向けて現在の行動を律していこうとする傾向を強くもっている今の私たちから見て、過去・現在・未来との関係のとり方がかなり異なっていることに注目しつつ、啓蒙の時代の進歩の考え方と未来のとらえ方の記述を文学や個人の記録の文章から抽出して研究対象とした。

研究対象の形としては(手稿・出版物のどちらも含む)日記・手紙及び文学作品を想定し、内容的には主に個人の人生の経緯の語りを対象とした。物語の共有は、書かれ、それが読まれることによって二次的共有の機会を得て、人生の物語は共有される度に、閉じて完結し固定したものから、展開をもった未完結の現在(のようなもの)をもつことになる。このような対象を設定することに意義があるのは、消費社会の隆盛に伴って出版市場が拡大し、出版物(特に雑誌などの定期刊行物、書簡集、小説など)が強い影響力をもつようになったことが18世紀英国文化の大きな特徴であり、これは勿論読書に、そして人々の書くという行為に作用し、また読書傾向や記述の流行が出版物の動向

に反映され、読み、書く行為を含めた日常の生活と、活字で表現された世界は相互に深い関係をもったと考えられるからである。

3. 研究の方法

対象とする個人の記録は、印刷文化と情報通の社会に生きた女性、スペンサー伯爵夫人(Margaret Georgiana, Countess Spencer, 1737-1814)及びその周辺の手稿資料である。それを使って、そこに表われる価値観(家族や社会の中での自分の役割、内省と行動、著者と読者、人間関係のつくりかた、友情についての考え方、文学作品の読み方、文学者・政治的文化的有力者・教育者との親交から得た視点など)を分析し、文学作品との関連を明らかにするという方法をとった。なお、当研究の主眼となる印刷物と手稿との関係についての関心の高まりは、最近の諸研究書からみても明らかである。

4. 研究成果

まず、フィクションの中での、登場人物が人生を語る設定では、これまでの研究でもとりあげてきているセアラ・フィールディング(1710-68)の作品を再検討していただくことから始めた。彼女の作品のなかでも特異な『クライ』(1754)について、先駆的で際立った特質をもつスターン(1713-68)の『トリストラム・シャンディ』(1759-67)の視点と1750年代の文学作品を考えるシンポジウムの一員として、その革新性を考察する論文を発表した(口頭発表1)。この発表でのポイントは、人間の本性を描き出すためには、空想の力を借りた不自然な設定が必要であるという主張がなされることである。この作品は、興隆する書物市場が文学作品や世界を支配する力への不安や、数の力や妨害音の大きさで他を圧するマスメディアや民衆の影響力への危惧を想定したものと読むことができ、それもフィクションが可能にした革新的視点だった。

個人の記録の考察においては、女性たちの日常の記録と啓蒙主義的な考え方についての検討を始めた。宗教的な内省でも、人生の物語においても、綴られ、語られる内容は、過去、あるいは過去と現在のつながりに重点がある。人間の世界の未来、人間社会の未来像を18世紀の人々は想定しないのか、するとしたらどのように取り上げるのか、というのが、自分に向けた問である。ISECS(国際18世紀学会)での発表(2)は、スペンサー伯爵夫人の手紙を使って、彼女の「改善」の考え方を考察した。彼女にとって啓蒙とは日常を意識的に管理し、計画に則った毎日を方法と規則に従って送ることだった。

サムエル・ジョンソン(1709-84)が「茶詩人」と評される書物に関する考察では、社会の中での学者のスタンスの取り方と理想を取り上げた()。個人の記録からの考察においては、女性たちの日常の記録と啓蒙主義的な考え方について、考察を進めているが、宗教的な内省でも、人生の物語においても、語られる内容は、過去、あるいは過去と現在のつながりに重点があり、未来は宗教的に託されるものであり、社会の未来は個人の思考や想定の対象になりにくい。そんな中で、知識を集積し、選定して「編集者」の取捨選択が入った知識・情報を世の中に送り出す様式で顕著な功績のあったバーボールド(1743-1825)に注目した()。彼女は、50巻にもわたる小説のコレクションである『英国小説家』(1810)の解説者であり、莫大な知識を集積し、壮大な視野をもって、一般読者たちにたいする識者としての使命を果たそうとした文学者であり、そしてまた広い領域に目を配ることのできる企業家の面ももっている。彼女の334行に及ぶ詩『1811年』(1812)は、年号を題名とする詩が風刺として書かれるという伝統に

沿ったものであり、非常に銜学的で、また時代の関心事に即した時局的要素をもつ。そこで彼女が把握する現在は、すでに足元が危うくなっている(そしてそれに気づこうとしない)老いた偉大な国の現在であり、未来は荒廃である。しかし、未来は自国から自由を勝ち取った国に文化として継承される。未来を政治的支配に求めることの空虚さを指摘し、文化的帝国の永続性に望みをつなごうとしている。そしてまた一方で諦観と揶揄をこめる。

「疾病、ナラティヴ、未来」においては、流行病についての記述をとりあげた()。

『ペストの記憶』においてデフォー(1660-1731)は過去に取材して現在に語りかけるにあたり、過去を生きた架空の人物を創出することにより、現在と過去をつなぐ構造を創りあげ、語り手が自分の未来へ向けてメッセージを送る仕組みを創った。レイディ・メアリ・ワートレイ・モンタギュ(1689-1762)の行動は、トルコの人痘法をイギリスにもたらし、いずれはワクチンへとつながり、それにより今の私たちにも大いに関わりをもつことになっている。彼女の行動は彼女の未来に大きな働きかけをしたということだ。一方で、彼女は文才に秀でた人物であったが、詩作や雑誌記事においては、過去を振り返るか、現在への注目の際には当時の医者をも諷刺し、諷刺の形で現在の関わりに留まった。未来とつながる現実の子供たちの健康を守る行動はとったが、未来の人類へのメッセージを執筆しようとはしなかったのである。「都市生活とビール~家庭とノスタルジア」においては、家庭の女主人のためのレシピブックにおける理想について、失った過去と捉えられるものと目の前の現実をとりあげた()。この関連で18世紀のカリカチュアに表れる醸造業者に関する口頭発表も行った。醸造業者は急速に富と権力を得て社会風刺の恰好の材料となっていた(5)。

「対戦・伝統・予測 チェスと著作」においては、長い歴史をもつチェスに注目し、娯楽解説本及び論考と手稿の詩をとりあげ、過去・現在・未来の捉え方を論じた。ここでの主人公はスペンサーの親友ハウ(1721-1814)とウェールズの資産家モリス(1727-1789)、そしてベンジャミン・フランクリン(1705/06-1780)である()。

COVID-19の影響による2021年度の研究計画変更により2022年度も当初とは違う成果を得ることになった。変更の結果、研究成果を書物の形にした。新たな資料を扱うことは叶わなかったがかわりに2022年度中に書物としてまとめる作業を行った。書物の内容は、研究の核にしてきたスペンサー伯爵夫人の手稿資料を使って18世紀の女性の記録のつけ方、たどってきた過去の捉え方、現在の自己の位置づけ、そして未来の展望の傾向について詳細に考察するというものである。彼女の場合、若いころからの友人との文通や著名人たちとの交流に加えて、長い人生の大部分を手紙のやりとりで共有することになるハウ夫人とかわしていた手紙が膨大な数にのぼり、そして子や孫との文通が加わり、その上、彼女に慈善を求める請願者たちの手紙とそこに書き込まれた対処のしかたが彼女の人生を物語る。この研究では、自らを意識的に律する生活を送り、そのことをまずは自分に向かって確認するために文字の記録として残していた彼女の文学性の豊かさとそれに依存する危うさについても注目した。

〔口頭発表〕

- 1) 鈴木実佳 「自然・当然・不自然と創作物」 2019年7月13日 日本ジョンソン協会第52回大会シンポジウム「フィールドディングとスターンをつなぐ時代へのアプローチ」
- 2) Mika Suzuki, 'Improvements in Life and a Woman Exceptionally Privileged' in 15th

International Congress on the Enlightenment, Edinburgh, 14–19 July 2019, Enlightenment Identities .

- 3) 鈴木実佳 「18世紀のトウヒ(唐檜)ビール」<発酵に関わる歴史・文学・言語の研究と歴史文化拠点の形成班>第2回発酵研究会、日時:2022年9月2日
- 4) 鈴木実佳 「お茶ある限り希望あり」'... while there is tea, there is hope.' Pinero、2022年10月21日第27回静岡健康・長寿学術フォーラム 「お茶と一服、健康と安全から長寿を考える」
- 5) 鈴木実佳 「ビールのカリカチュア」2022年11月4日 学術シンポジウム グローカリゼーションにおけるビール文化
- 6) 鈴木実佳 「お茶と集い--イギリスと日本の文学から」シンポジウム「グローバルな視野からとらえた日本の茶と茶文化」2023年3月25日

〔論文〕

鈴木実佳、「茶詩人」ジョンソン補遺 日本ジョンソン協会年報 No. 43(July 2019) 12-16. 査読有

鈴木実佳 「自然、不自然、セアラ・フィールディング」『人文論集』70 1 (2019年7月) 47-64, VI. <http://doi.org/10.14945/00026760>

鈴木実佳 「啓蒙の時代の女性と向上心」『人文論集』70 2 (2020年1月) 85-98, viii. <http://doi.org/10.14945/00027098>

鈴木実佳 「研究ノート」「バーボールドと「未来」」『人文論集』71 1(2020年7月) pp. 1-10, III.

Mika Suzuki, 'Johnson the Tea Poet: A Scholarly Role Model and a Literary Doctor in Modernizing Japan', Johnson in Japan, Kimiyo Ogawa and Mika Suzuki, eds., Foreword by Greg Clingham (Lewisburg, Pennsylvania, Bucknell University Press, 2020), pp. 74-87.

Kimiyo Ogawa and Mika Suzuki, 'Introduction', Johnson in Japan, Kimiyo Ogawa and Mika Suzuki, eds., Foreword by Greg Clingham (Lewisburg, Pennsylvania, Bucknell University Press, 2020), pp. 1-9.

鈴木実佳 「来るべき時に彼女に喜びを与えてやろう」: 料理・伝統・その先へ 『人文論集』72-1(2021): 1-14、英文要旨I

鈴木実佳 (オースティンと針仕事)『雪月花』[長艸繡工房ニューズレター]令和3年6月号

鈴木実佳 「疾病、ナラティブ、未来」『旧制静岡高等学校創立100周年記念プレ事業報告書~文理両面から迫る新型コロナウイルスと自然災害~』静岡大学人文社会科学部・理学部 令和3年11月30日 2021年: pp.1-6.

鈴木実佳 「都市生活とビール~家庭とノスタルジア」『人文論集』72-2(2021): 127-136. [2022年1月] <http://doi.org/10.14945/00028651>

鈴木実佳 「対戦・伝統・予測 チェスと著作」『十八世紀イギリス文学研究第7号 変貌する言語・文化・世界』日本ジョンソン協会編 東京: 開拓社 2022, 185-205, 256-257. 978-4758923729

〔単著〕

『淑女のたしなみ・貴婦人の愉しみ: 書簡から読み解く、ある18世紀イングランド上流女性の日常』(静岡大学・東洋書林、2023) 2023年3月 本文176頁

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 鈴木 実佳	4. 巻 -
2. 論文標題 疾病、ナラティブ、未来	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 旧制静岡高等学校創立100周年記念プレ事業報告書～文理両面から迫る新型コロナウイルスと自然災害～	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 実佳	4. 巻 72 2
2. 論文標題 都市生活とビール～家庭とノスタルジア	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文論集	6. 最初と最後の頁 127 136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00028651	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木実佳	4. 巻 70 - 1
2. 論文標題 バーボールドと「未来」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文論集	6. 最初と最後の頁 1 - 10, iii(英文要旨)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00027600	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 実佳	4. 巻 70 2
2. 論文標題 啓蒙の時代の女性と向上心	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文論集	6. 最初と最後の頁 85 98, viii
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00027098	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 実佳	4. 巻 70 1
2. 論文標題 自然、不自然、セアラ・フィールドイング	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文論集	6. 最初と最後の頁 47 64, vi
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14945/00026760	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 実佳	4. 巻 43
2. 論文標題 「茶詩人」ジョンソン補遺	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本ジョンソン協会年報	6. 最初と最後の頁 12 16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 鈴木 実佳
2. 発表標題 自然・当然・不自然と創作物
3. 学会等名 日本ジョンソン協会第52回大会シンポジウム「フィールドイングとスターンをつなぐ時代へのアプローチ」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mika Suzuki
2. 発表標題 Improvements in Life and a Woman Exceptionally Privileged
3. 学会等名 15th International Congress on the Enlightenment 'Enlightenment Identities' (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 服部典之、福本宰之、内田勝、Hiroki Kubota, 川津雅江、原田範行、川田潤、三原穂、西山徹、金津和美、鈴木実佳、廣田美玲、吉田直希	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 243
3. 書名 十八世紀イギリス文学研究 第7号, 186-206	

1. 著者名 Kimiyo Ogawa and Mika Suzuki, eds	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Bucknell University Press	5. 総ページ数 191
3. 書名 Johnson in Japan	

1. 著者名 鈴木実佳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 静岡大学・東洋書林	5. 総ページ数 176
3. 書名 淑女のたしなみ・貴婦人の愉しみ：書簡から読み解く、ある18世紀イングランド上流女性の日常	

〔産業財産権〕

〔その他〕

鈴木実佳のウェブサイト https://wwp.shizuoka.ac.jp/mikasuzuki/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------